

2025年以降のこれからの理学療法を見据えて、日本における社会保障制度改革の流れを概観し、世界保健機関(World Health Organization: WHO)が2030年までにめざすリハビリテーションの概要、WHOの中心分類として新たに提供される国際保健介入分類(International Classification of Health Interventions: ICHI)、世界の理学療法先進協会が目指す将来戦略についてまとめた。これらを踏まえて、座談会を通して、これからの理学療法の姿について多岐の視点から大いに語り合っていたいただき、理学療法・理学療法士に求められる姿を模索した。

■これからの時代に適応する理学療法(半田一登論文)

2025年以降の理学療法士の姿を描くにあたり、1960年代からの制度的背景や理学療法士業務の歩みについて振り返るとともに、社会保障制度改革国民会議報告書や人口動態、理学療法士養成数などについても考慮しなければならない。そのうえで日本理学療法士協会として反省すべき点は反省するとともに、理学療法の科学化や起こり得る社会現象への対応を通じ、幅広い理学療法士の活躍の場を獲得できるように、時代を切り開いていく覚悟である。

■これからのリハビリテーション—世界保健機関リハビリテーション2030会議から(久野研二論文)

国連の持続可能な開発目標実現のため、WHOは以下の点をこれからのリハビリテーションを巡る重要な点としている。それは、生活機能という視点で人間を機能的に連続的な存在として捉えることの普及啓発、すべての人がすべての段階でリハビリテーションを含む適切なサービスが利用できることをめざすユニバーサル・ヘルス・カバレッジの実現、それによって人権と多様性を基礎にしたインクルーシブな社会を実現することである。

■国際保健介入分類とチーム医療(向野雅彦論文)

国際保健介入分類(ICHI)はWHOによる国際分類ファミリーの中心分類の1つとして、現在開発が進められている分類である。ICHIのコードは国際生活機能分類(International Classification of Functioning, Disability and Health: ICF)の分類とリンクしており、ICFの評価に紐づけた介入の記載が可能である。リハビリテーションにおける介入をこのような枠組みで記載することで、行われているチーム医療の実態を共通の枠組みで整理し、統計に利用することが可能となる。

■2025~2030年に向けての戦略—世界規模でみたこれからの理学療法(伊藤智典, 他論文)

日本における日本理学療法士協会のような、理学療法士の専門性を高め、市民の健康に貢献する国レベルの団体が、世界中の国や地域に存在している。世界的組織としては、世界理学療法連盟がある。本稿では、米国、カナダ、英国、オーストラリアの専門職団体と、世界理学療法連盟の戦略計画、政策声明などに基本情報を織り交ぜたうえで、将来の展望を紹介する。

■座談会: これからの理学療法の姿(金子文成, 榊 聡子, 松井一人, 松田淳子, 山本理恵子, 内山 靖)

2025年に向けて地域医療構想、地域包括ケアシステムの完成を控えるなか、その後に向けた理学療法の在り方を考える。理学療法には「健康寿命の延伸」や「地域の創生」、「社会保障費の効率化」という役割が期待される一方で、目まぐるしく発展する科学技術と融合した新たな理学療法の創造も求められる。これからの理学療法の姿やその可能性について、各分野で活躍する先生方に議論していただいた。